

# イトウ

*Hucho perryi*

サケ科



イトウ（幕別町ふるさと館）

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 名前の由来

地方名の「イト」に由来しているが、イトの意は不明だという。漢字名：「魚」へんに「鬼」。「伊富魚」の字も

## 特定種

国レッドリスト（2007）…絶滅危惧 I B (EN)

北海道レッドデータ…絶滅危機種（Cr）

## 形態的特徴

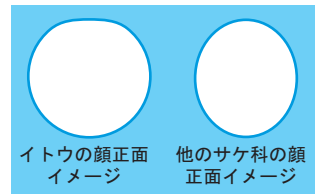
最大体長は1 mを超え、体重も最大で45kgぐらいに達するという。体は細長く、体高は低い。頭部背面が平坦、頭部から尾部までの背側面に小黑点が多数散在、側面は銀白色、腹面は白、背面は青緑褐色。脂ビレをもつ。脂ビレとはサ

ケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる、背ビレと尾ビレの間のヒレ。条《スジ》がない。

## 類似種と見分け方

他のサケ科の魚。

顔を正面から見たとき、他のサケ科の魚は縦長の顔で頭頂が丸いが、イトウは丸顔で頭頂が平らである。



イトウの顔正面イメージ

他のサケ科の顔正面イメージ



イトウの顔

## 一生

ふ化後、7～8月に砂利の中から稚魚が浮上する。ふ化直後は群れて生活しているが、その後単独となり、流下する。特に河岸の落葉・落枝中で生活していることが多い（妹尾優二）。段々と流れの中心部にも出るようになる。成長は他のサケ科の魚と比べると遅く、川によって60cmに達するのに10年近くかかることもある。何年かして河口まで下り、汽水域や沿岸に生息する。春に遡上し上流部で産卵するが、サケなどと違って産卵後も死

なず、生涯何度も産卵する。北海道のダム湖では生涯一度も降海しないで繁殖を繰り返すものもある。未だ謎が多い魚で、いつ海に下るか、海にはどれくらいの期間いるのか、生涯に何度川と海を行き来するのか、個体群のすべてが（サケのように）海に下るのか、一部だけが（サクラマスのように）下るのか、などまるでわかっていない。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期				■								
孵化期				■								
れき間から浮上							■					
幼魚期	オスは4～6年後、メスは6～8年後に成熟。											
成魚期			■									
				産卵					産卵後も死なず、何度も産卵する。9～11年			

## 生息環境・分布

湿原地帯の河川の中・下流域、湖沼。稚魚から2年魚くらいは河川の上流や中小の枝沢、数年魚で本流の中心部、成長して汽水域や沿岸に生息。産卵床は礫質河床の淵尻の浅瀬、稚魚は岸際の流れが少ない場所、その後本川中下流域の深みに生息。

**分布：**サハリン、沿海州、南千島、ユーラシア大陸。国内

## 食性

孵化後15~30cmくらいのうちはカワゲラやトビケラを食べ、後に魚類食（フクドジョウ、トゲウオ、ヤツメウナギ）に

では北海道のみ。根釧原野、猿払原野、サロベツ原野、尻別川、朱太川等で生育が確認されている。

十勝では十勝川に少数生息している。河口付近に生息していると考えられるが、芽室近郊~屈足ダム間で希につり上げられる。十勝川千代田堰堤のサケマス捕獲の際、希に捕

切り替わっていくという。

## 繁殖生態

産卵は4~5月（北海道）雪解け増水が引きはじめる頃、一斉に遡上を開始し、上流部でおこなわれる。春に産卵する日本産のサケ科の魚はイトウだけである。産卵期になると、オスは体の後半から尾ビレにかけてあざやかな朱色に染まるが、メスは銀白色のままほとんど体色を変えない。河川の上流域、淵から瀬へ移行する場所（瀬頭）で産卵す

る。産卵数は体長75cmで約5千粒、95cmで1万粒あまり。多くのサケ科の魚はメス1尾に複数のオスが寄り添って産卵・放精をおこなうが、イトウはたいてい1対1でおこなう。また、卵は1箇所だけに産まず、複数の瀬頭に分割して産む。産卵後は、死ぬことなく繁殖を繰り返す。寿命は15~20年。

## 他生物との関わり

30cmを越えるくらいの体長になると、フクドジョウ、トゲウオ、ヤツメウナギ等の他の魚を捕食するほか、ネズミなどの陸上の小動物も食べるという。



朱色の婚姻色を浮かび上がらせたイトウ  
(幕別町ふるさと館)

## 興味深い話

■日本最大の淡水魚で、体長1m以上、体重45キロに達するものもあるという。昭和12年に十勝川下流で体長約2.1mのものが捕獲された。(イトウ論稿。北海道のイトウ《再録》、中村森純、淡水魚9 21-23、1983)

■味はかなりおいしいという。刺身は珍品といわれ、ルイベにしても良い。

■蛇行河川ほどイトウが多く生息していると言われる。道北の蛇行河川にイトウが多い。

■イトウは十勝地方のアイヌ語では「チライ」といい、他の地方では「オペライベ(オピラメ)」と呼ばれる。イトウの産卵期は4~5月で、ちょうどそのころ花が咲くフクジ

ユソウのことを、十勝のアイヌ語で「チライムン」(=イトウの草)と呼び、他の地方では「チライアッコ」(=イトウの花)という。イトウと一緒に川に来るオシドリを「チライマチリ」(=イトウと泳ぐ鳥)というところもある。

■アイヌの人たちがはく魚皮沓は本来イトウの皮で作るもので、その方が強いのだと言われる。

■大きなイトウは、水面を泳ぐヘビやネズミ等も呑み込む。アイヌ伝説には、鹿を引きずり込んで飲み込んだが、鹿の角で腹を突き破られ死に、川をせき止めたというイトウの話がある。ただし、アイヌ伝説における巨大魚の多くは、イトウではなくアメマスだという説もある。

## 配慮事項

現在生息数が激減している魚である(発見産卵床数からの推定によると、全道の親魚数は約1,000尾、十勝川では11尾だとも言われる。《北海道イトウ保護フォーラム2002》)産卵場所として、上流域の支流、勾配1%前後の緩やかな流れの平瀬で、礫質河床、水深20cmほどの場所が必要。隠れ場所としての淵も必要なので、周辺状況として、淵・瀬が交互に現れていること、水中の倒木や水草、水面を覆う

植生といった「カバー」の存在も必要とする。

稚魚の生息場所として、草の生い茂った幅2m程度で伏流水由来の小水路やたまりが必要。(=湿原状のエコトーン)成長や時期によって河川の上流から河口部まで幅広い生育域を持つので、遡上可能性も大切である。また釣り等の捕獲圧も懸念される。餌となる小魚が生息できる多様な河川環境が必要。

### 参考文献

「漁業生物図鑑 北のさかなたち」長澤和也・鳥澤雅 編、(株)日本海洋センター 1991

「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と溪谷社 1989

「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦 保育社、1990

「図説 魚と貝の大辞典」望月賢二 監修、魚類文化研究会 編、柏書房 1997

「自然復元特集4 魚から見た水環境-復元生態学に向けて/河川編-」森誠一 監修・編集、信山社サイテック、1998

「北海道の淡水魚」稗田一俊、北海道新聞社 1984

★妹尾優二：(株)エコテック、流域生態研究所

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ